

即興手話-日本手話使用者は  
会話中いかにして単語探索問題を解くか  
坊農真弓  
(国立情報学研究所・総合研究大学院大学)

要旨

本発表では、手話の会話中の単語探索問題における自己修復の連鎖 (Shegloff et al. 1977) に特有の「即興手話表現」と呼ばれる性質について報告を行い、日本のろう教育によって日本語と日本手話 (JSL) を獲得した話者の中には、バイリンガル、バイモーダルなコミュニケーションスタイルが広く見られることを観察に基づいて結論付ける。

ろう教育においては、1933年、鳩山文部大臣のもとで聴覚口話法が実施されるようになった。この状況は、1993年に当時の文部大臣がろう教育において多角的なアプローチを、とりわけ手話、同時法、手話併用話法などの使用を推奨するようになるまで継続した (Wakinaka 2009)。その結果、日本手話の話者は現状二言語を習得している。1つはろう者の友人間、家族間で使用する日本手話で、もう1つはろう教育で学び聴者との会話で使用する日本語である。

本発表では、日本手話の話者が、何かそのレキシコンではっきりと表わせないことを表現したい時、日本手話と日本語口話の口の動きを同時に使用して、即興で一時的な表現形式を創り出すことを主張する。2011年に発表者らが構築した JSL のコーパスを用いて、日本手話の話者が対象について語ることに困難をきたす例を3件報告する。

これらのケースはいずれも似通った連鎖構造をもち、平行した非言語的な動きが見られる。第一に、このような連鎖構造は、修復の区域において質問-応答による隣接ペアを含む。すなわち、当該の話者 (A) が自分の番で修復を始めた後、A は対話相手の B に適切な手話表現を求める。B はそこで、双方の動きが隣接ペアとして構成されるような答えを与える。ここで扱う3つのケースは全て以下のような性質を持っている。

- 話者は流暢ではない手話表現の増加によって修復の区域を開始する。
- 修復の結果は、隣接ペア形式の使用によって協同的に構築される。
- ナラティブな語りにおいては、話者は対話相手を見ない。しかし隣接ペアの使用時に対話相手に視線の方向を向ける。そして協同的な修復の結果を得た後に、再びナラティブな語りに入るために視線を逸らせる。

次に、日本手話話者がその対象を表現する時に、彼らは手話表現 (描写的手話、CL など) と口の動きの組み合わせを用い、これらは同時に行われる。

ここで論じる即興手話表現は、日本手話話者が、受け手に伝えようとする対象に関して表現するのが困難な状況において、適切な語や表現を決定することを含む単語探索問題の戦略である。ほとんど全ての日本手話の話者は、バイリンガルでバイモーダルな環境で教育を受けてきているため、彼らの思考に現れ

る対象を表現するのにもともと幾つかの戦略を持っており、それには日本手話の一部としての手の動きと、日本語口話から引き出される口の動きの組み合わせが含まれる。その成果は、手話のインタラクション分析に貢献するのみならず、言語学の基本的な問題であるネイティブと非ネイティブの間のレキシコンの境界の問題 (Brentari and Padden 2001) や、語彙化と脱語彙化 (Cormier et al. 2012) の問題についても寄与するところがあると考えられる。